



浅野家家紋

# 広島城築城から 浅野氏による藩政確立まで

## はじめに

平成31年(2019年)は、広島藩初代藩主浅野長晟ながあきら げん なが元和5年(1619年)8月(旧暦)に広島城に入城してから400年を迎える年になります。

広島市では、広島発展の基礎を築いた浅野氏のことを広く知っていただくために、浅野氏の藩政や広島城下の暮らし、産業、文化などを紹介するリーフレットを6回にわたり発行していきます。

## 知っとる? 現在の天守閣は三代目!?

**明** 治維新後、広島城内には軍の施設が徐々に設けられ、明治7年(1874年)の火災で本丸御殿等を焼失したことも影響し、天守閣、裏・中・表御門、平櫓等を残すのみとなってしまいました(その後、昭和6年(1931年)1月に天守閣は国宝に指定)。

昭和20年(1945年)8月6日、米軍による原子爆弾の投下により、天守閣をはじめ城内の建造物はすべて壊滅してしまいました。

昭和26年(1951年)、広島国体の協賛事業である体育文化博覧会の開催にあわせて木造の仮設の天守閣が建てられました(国体終了後に撤去)。

現在の天守閣は、広島復興大博覧会の開催に際して、鉄筋コンクリートにより外観を復元して建造されたもので、昭和33年(1958年)3月26日に完成し、武家文化を中心に紹介する歴史博物館として利用されています。



史跡広島城跡



広島城天守閣(復元建物)

## 広島城天守閣の利用案内

開館時間	9:00～18:00(12月～2月は17:00まで) ※入館受付は閉館時間の30分前まで
休館日	年末(12月29日～31日) ※このほか臨時休館日あり
観覧料	大人 …………… 370円(280円) シニア(65歳以上)・高校生 …………… 180円(100円) 中学生以下 …………… 無料 ※( )は30名以上の団体料金



# 毛利氏による広島城築城と福島氏の入国

**戦** 国時代に中国地方の大半を支配する大名となった毛利元就の孫である輝元は、現在の安芸高田市にあった郡山城に替わる新城の建設を決意し、天正17年(1589年)に当時五箇村と呼ばれていた太田川河口のデルタに築城を開始しました。これが広島城です。

輝元自身は天正19年(1591年)1月に広島城に入城したといわれています。しかし、輝元は慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いにおいて、出陣はしなかったものの、石田三成に擁立されて西軍の総大将になったことにより、徳川家康から周防・長門(現在の山口県)の2か国に減封され広島城を去ります。

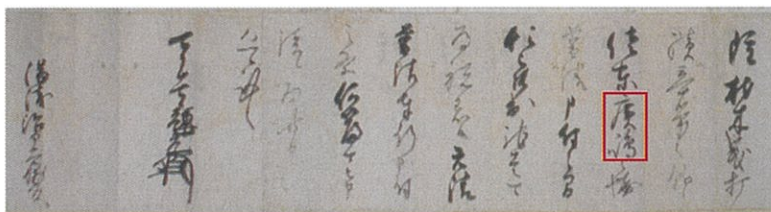


毛利輝元像 [毛利博物館蔵]

## こぼれ話

### 広島の名の由来

毛利輝元が、楯初めのとき毛利家の祖 大江広元の「広」と、この地の案内人となった福島元長の「島」とを合わせて命名したという説もありますが、デルタの中の「広い島」という地形によるものとみるのが妥当と考えられています。



### 毛利輝元書状(湯浅家文書) [萩博物館蔵]

毛利輝元が備後の国人領主湯浅将宗に対し、広島城の堀の工事への協力を命じた書状。天正17年のものと推定され、「広島」の地名が初めて登場する書状の一つとして注目されます。

**輝** 元に替わり、豊臣秀吉のいとこといわれる福島正則が、関ヶ原の戦いの功績により芸備両国49万8千石余に加増され、慶長6年(1601年)3月に広島城に入ったと伝えられています。

正則は、広島城の三の丸や外濠、堤防の整備を進めるとともに、領国検地の実施や町人町・寺町の整備など城下の整備を進めました。

しかし、元和3年(1617年)春の長雨で太田川が洪水となり、城囲いをはじめ広島町中の堤防・橋が決壊、流失する災害が起きました。このため、正則は幕府に対し、城の修復の許可を再三申請するもなかなか許可が下りないため、正式な許可が下りないまま修復を進めた結果、幕府からその罪をとがめられ、元和5年(1619年)6月、津軽(現在の青森県、のちに信濃国[現在の長野県]川中島へ変更)に減封のうえ転封されることとなりました。



福島正則画像 [東京国立博物館蔵]







**長** 晟が兄の死により浅野家を継いだのは28歳のときです。幸長の後継を誰にするかを決めるにあたっては、長晟を推す家臣と弟の長重を推す家臣との間で対立があり、長晟が藩主となった後も家臣団の間でしこりが残りました。長晟にとって幸いであったのは、大坂冬の陣・夏の陣において家臣団の奮戦に助けられ大いに戦功をあげるとともに、大坂出陣の留守を狙って蜂起した熊野一揆を家臣の浅野忠吉の手の者の機敏な処置により、首尾よく制圧したことで、家中の抵抗勢力を封じ込め、大名としての地位を徐々に強化していくことができました。また、元和元年(1615年)11月に、長晟と家康の三女振姫との婚儀が整い、家中に対する地位に一層重みを加えることになりました。

## 浅野氏の広島城入城

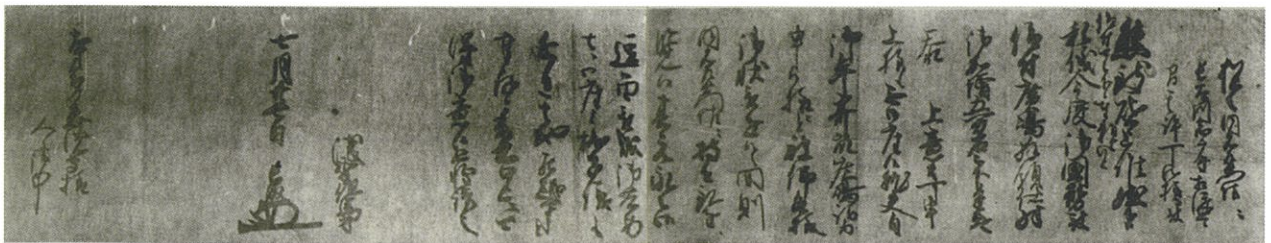
**元**和5年(1619年)5月末から京都伏見城に滞在していた将軍徳川秀忠は、6月2日に福島正則を転封した後、7月15日和歌山藩主浅野長晟の広島42万6千石余への転封を決めました。

長晟に正式な命が下ったのは7月18日のことです。その際、秀忠はいつも寝所としている奥座敷に長晟を呼び、5万石を加増のうえ芸備を与える旨を親しく申し渡した後、「浅野家は長政以来將軍家に忠節を尽くして遺漏がなく、そのうえ振姫との婚姻により一度は縁続きとなった間柄(振姫は元和3年[1617年]に死去)でもあり、しかも広島は「中国の要」ともいべき重要な地であるだけに、めったな者に与えるわけにはいかないが、その点お前ならば安心して任すことができる」(『芸藩輯要』より)と言ったといわれています。

7月22日(23日という説もあり)和歌山に帰城した長晟は、27日に浅野左衛門佐知近ら数十名を広島城請取りのため先発させ、自らは嫡子岩松(のちの光晟)と家臣団を率いて8月4日海路西に向かい、6日には備後の鞆(現在の福山市鞆町)に到着しました。鞆には新しい福山藩主水野勝成に領知の引渡しを終えたばかりの幕府の上使が待機しており、新領知の引渡しを受けた後、再び海路で広島に向かいました。



浅野長晟画像[広島市公文書館提供]



広島受封に関する浅野長晟書状[個人蔵]

元和5年7月27日に広島城を預かる幕府の上使本多忠政に広島受封を伝えたあいさつ状

**長** 晟一行は、8月8日に広島に上陸し、天神町(現在の中区中島町)の天神坊(満松院、現天満神社)で休憩の後、たそがれ時に広島城に入城したと伝えられています。



# 浅野氏による藩政確立

長晟は、広島入りした直後の元和5年(1619年)8月10日、家臣12名等を郡中に派遣して、代官割(郡を支配する代官の振り分け)が行われるまでは、いっさい田畑作物の刈り上げを差止め、福島氏時代の年貢・小物成(雑税の総称)で郷蔵に保管されているものの明細を書き出させ、百姓の他国への出国を厳禁し、竹林の伐採を嚴重に取り締まることなどを通達しました。

続いて、四家老を三次・三原・小方(現在の大竹市)・東城の要地に配備し、郡村には約1万石を単位に代官を置き、各種奉行を配しました。この際、三次の拝領に異議を唱えた家老の浅野左衛門佐知近は、紀伊国時代から長晟の軍令に背くなど不義の振舞いが多かったこともあり、元和5年(1619年)11月26日に城内で成敗されました。

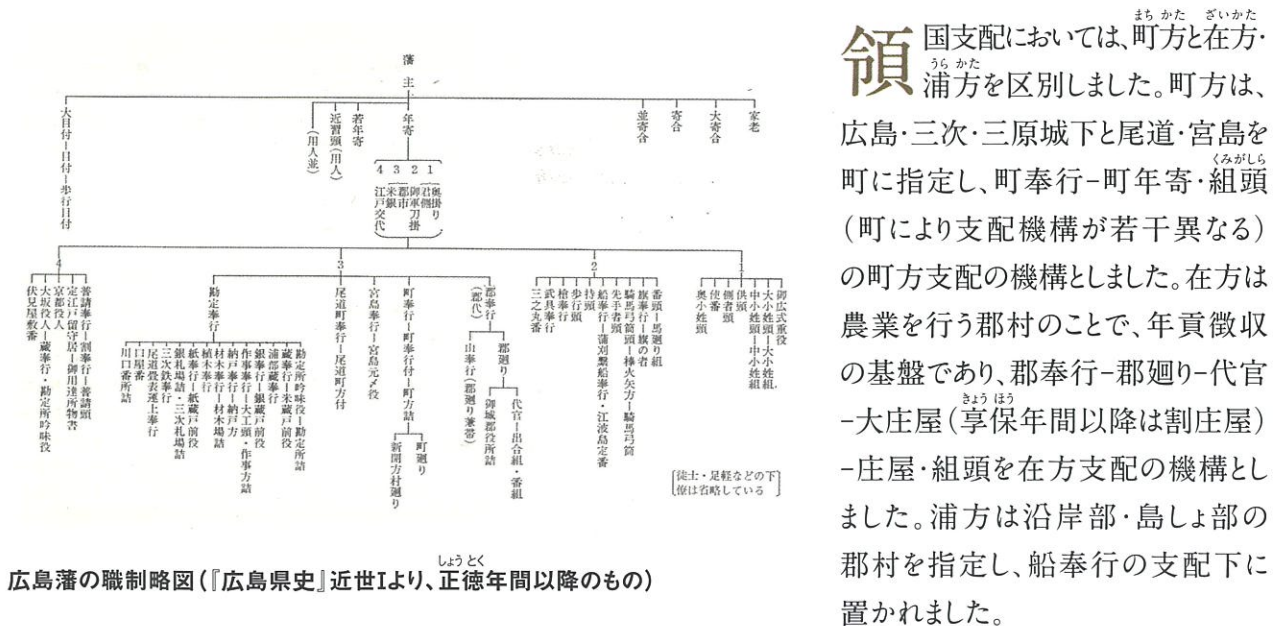
家臣団に対しては、翌元和6年(1620年)に一般藩士の知行割を行い、行政組織についても寛永18年(1641年)から家老を世襲制として執政の地位につかせ、数名の加判役を加えて藩政を取り仕切らせたのをはじめ、郡奉行以下の諸奉行を新設して職制機構を大幅に充実させ、官僚制度的な整備を図りました。



## 広島藩の領域図

「御領分郡村絵図」[広島市立中央図書館蔵]

広島藩の地域は、安芸国一円8郡で26万石余、備後国8郡で15万石余、総村数707か村であった(元和5年時点)。本図は郡ごとに色分けし、郡内村々の名称と町村界を示したもので、海陸の主要通路と宿駅が朱線・朱点で描かれている。本図は江戸時代後期のもの。

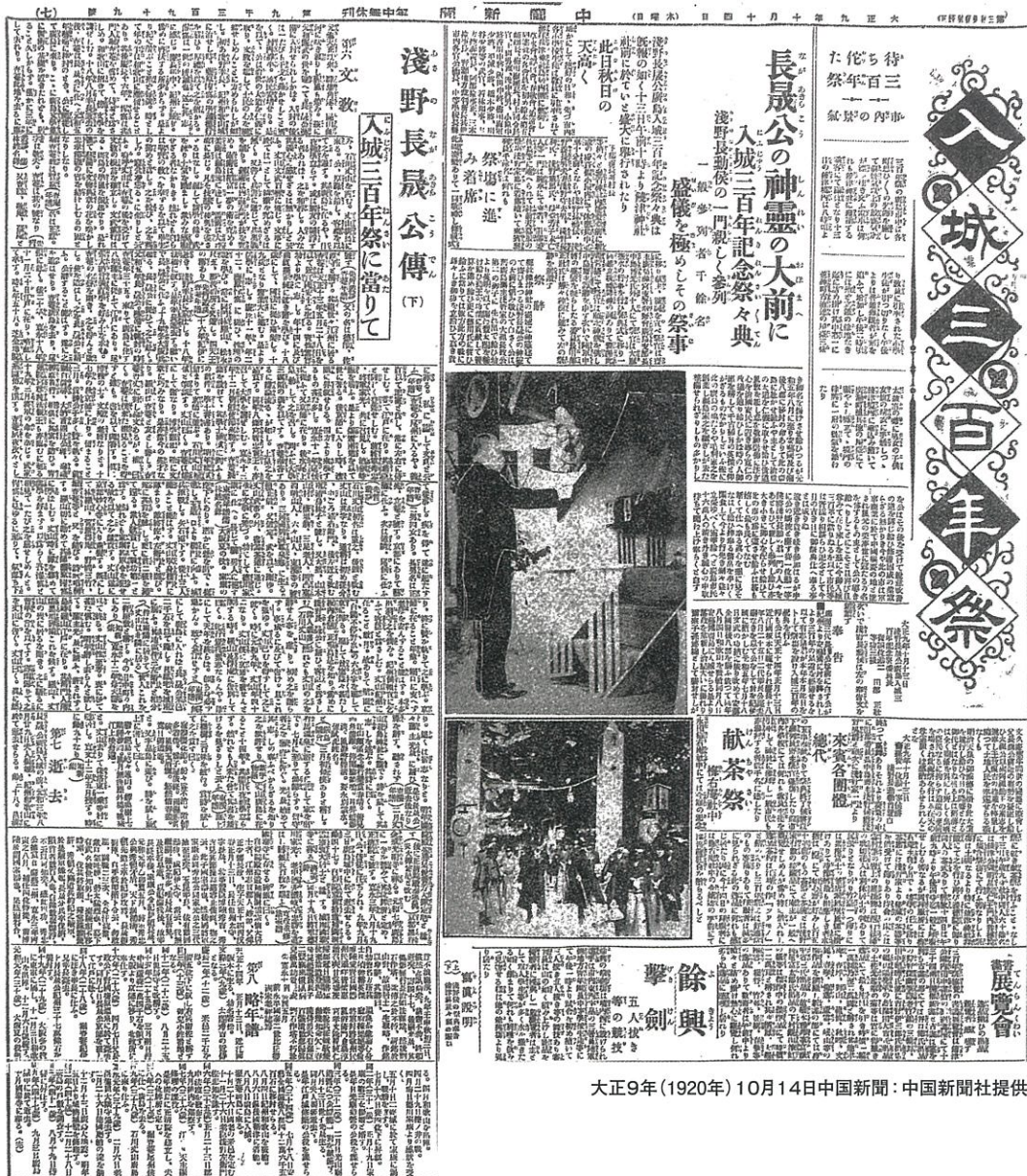


広島藩の職制略図(『広島県史』近世Iより、正徳年間以降のもの)

寛永9年(1632年)に領石高5万石の三次藩が分知(分家)されたのを契機に、これらの郡村において、寛永15年(1638年)と正保3年(1646年)に地詰(検地)が行われました。

このようにして、浅野氏による広島藩政は徐々に確立されていきました。





大正9年(1920年)10月14日中国新聞：中国新聞社提供

これは、浅野長晟公広島入城三百年記念祭(※注)を報じる新聞記事です。最後の広島藩主浅野長勲をはじめ、軍や政財界の関係者千名余が参列し、饒津神社で記念祭が盛大に開催されました。

10月13日と14日の両日、記念祭の一環として献茶祭や角力、撃剣、柔術、芸妓の手踊・琵琶・琴曲、十二神祇神楽などの余興が数多く行われるとともに、市中には山車や屋台などが多く出されるなど、街中にはぎわいを見せていた様子が見えます。

(※注)本来であれば、入城300目にあたる大正8年(1919年)に実施予定であったが、浅野家に不幸があったため、1年延期となった。

第2巻  
予告

テーマ「城下町の発展と商業・金融、藩の財政」発行まで今しばらくお待ちください...